

「マザルトブ」私の二人の祖父
アラナ 咲月 チェンドラー
「マザルトブ！」皆さんはこの言葉を聞いたこ
とがありますか。マザルトブはユダヤ教のお祝い
に言われる喜びの表現です。「おめでとう」「よ
かったね」「素晴らしい」「幸せに」など色々な
意味があります。
— 四年前の2013年3月。この日私は家族や友
達に囲まれて、何度もマザルトブを聞きました。
— 2歳の私はユダヤ教のバトミツバを行いました。
バトミツバは、ユダヤ教の子供が社会の一員にな
るための成人式です。この準備のために私は何年
も前からヘブライ語を勉強し、経典の教えを学び
ました。私の担当する教えは「犠牲」で、そのテ
ニマについて自分の考えをまとめてスピーチの原
稿も書かなければなりませんでした。
— 当日、教会の舞台上、自分のスピーチを読みま
す。300人以上いるゲストの中で、私にはどう
してもスピーチを聞いて欲しい人がいました。そ
れは私の二人の祖父です。二人は全く違う場所で

生まれ、違う人生を送って来ましたが、共通した
ことがあります。それはだれよりも多くの「犠牲」
を経験したことです。

私の父方の祖父は1924年にポーランドのユ
ダヤ教の家庭に生まれました。しかし14歳の時、
ドイツのナチスがポーランドに攻めて来ました。
家族はみんな収容所に送られましたが、祖父はあ
るポーランド人に助けられて、カトリックの少年
のふりをして四年間生き延びました。でも戦争が
終わって村に帰った時、3000人いたユダヤ人
は、全員殺されていて、祖父は一人ぼっちになり
ました。その後、21歳の時にアメリカに来て、
私の祖母と結婚し、4人の子供に恵まれました。
アメリカ人の私の父はその一番下の子です。

私の母方の祖父は1930年に日本の瀬戸内海
の小さな島で生まれました。12歳の時に大きな
町の学校に行くために、島を出ました。しかし、
そのころ日本では戦争が始まり、勉強はほとんど
できず、軍人になるために広島にある海軍兵学校
に入りました。学校の先輩たちは、「神風」とし

て飛行機に爆弾を積んで敵の船に当たって死んだ
そうです。でも祖父の順番が来る少し前の15歳
の時に戦争が終わりました。祖父は原爆が落ちた
ばかりの広島を歩いて、港から船に乗って島
に帰った時、沢山の親戚や友人が亡くなっていま
した。

私はバトミツバのスピーチを書きながら、この
二人の祖父のことを何度も考えました。12歳の
私のように若か、た時の祖父は、生きるために多
くの「犠牲」を払いました。家族、友達、勉強、
大切な人、大切な物、大切な時間が犠牲になりま
した。

そして同時に、その犠牲や苦しみを乗り越えて
希望を見つけたことで、今幸せな生活をしている
私がいることも考えました。ヨーロッパと日本で
戦争を生き延びてくれた二人の祖父が、一つの家
族として私のバトミツバを祝ってくれることが、
とても不思議で奇跡のように感じました。

その日、舞台に立った私は、まずハブライ語で
経典を読みました。そしてスピーチです。私は一

番前に座っている二人の祖父を見ました。ホロコ
ーストや広島だけでなく、長い歴史の中で多くの
犠牲になった人々のことを思いながら、スピーチ
を読みました。

スピーチが終わった時、会場はシーンとしてい
ました。すると、誰かが「マザルトブ」と叫びま
した。そして何人もの人が次々に続きました。み
んなの幸せを願う気持ちが「マザルトブ」になっ
て会場に響きました。

私は舞台から下りて、二人の祖父の席に向かい
ました。そして、尊敬と感謝と愛と喜びを込めて
こう言いました。

「グランパ、おじいちゃん、マザルトブ！」